

二十三 大会の挨拶

兄が弟は演説がうまいと人にいつていたことがあります。京都出身で片岡直温という人がおられました。この方は大蔵大臣などもなさった方でしたが、弟を百点とすればこの方は六十点。それから永井柳太郎といつて拓殖大臣をされたことがある人でしたが、この方は非常な雄弁家として知られた方でした。しかしこの方は八十点といつて人に話していたことがあったのです。

しかし、私は決して雄弁家などとは思っていないのです。それより兄こそ非常な雄弁家であると思つていたのです。それはなぜかといえれば内容が非常に豊富なのです。また兄は非常な名文家でもあったのです。学生時代、何か学生たちが檄文を掲げるときはいつも兄が書いていたということでした。私などとても追いつかないのです。

私は何か話をしようというときには、前もつて準備するのです。全国大会でのあいさつなどは前もつてしっかりと練習するのです。この頃はいたしません、以前は朝早く起き外に出て、まだ人通りの少ない道を歩きながら練習したものでした。ある年など何回も講演に行ったことのある警察大学の講堂を借りて練習したこともあったのですが、この時はあまり繰り返し大きな声を出したものですから、声をからしたこともあったのです。ある大会の時、OB選手が、私が大会の最後にあいさつするのを聞くために、会場